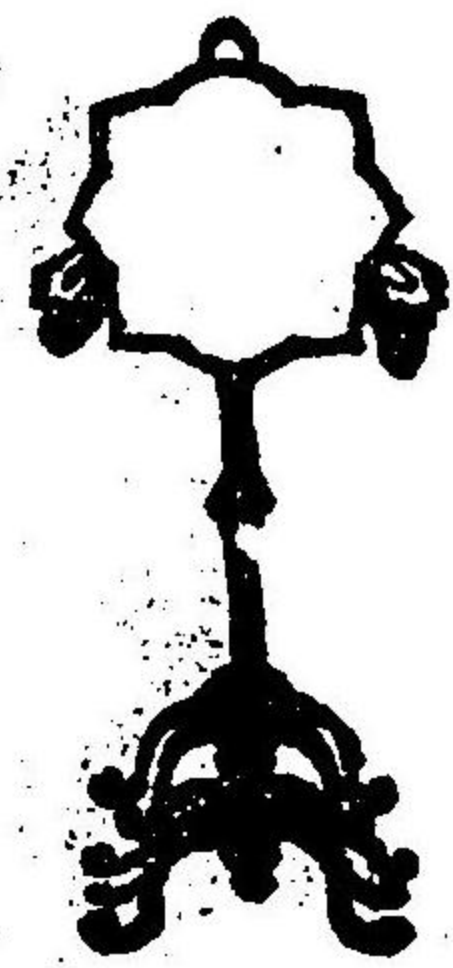
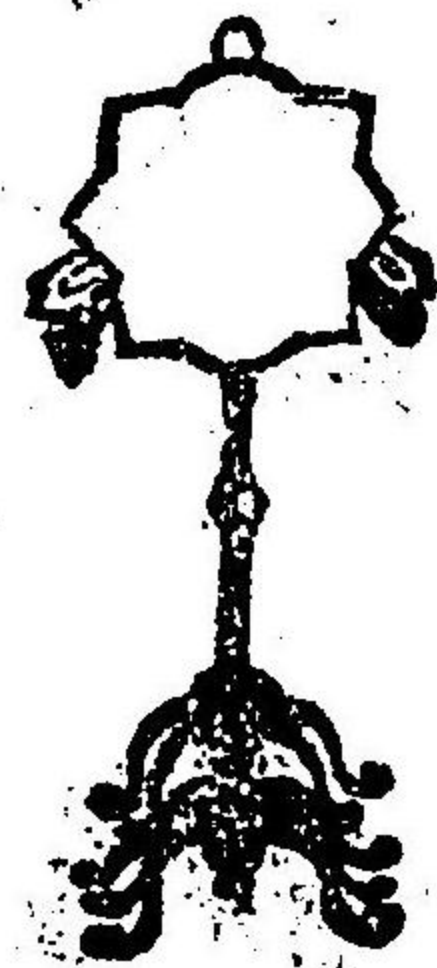


世にそむき 乳の香尖の香 忌む母に  
似なと家況に まなごまかせつ

うたたありや 我子病めりと さらぬだに  
ものおもふらん 君にいひやる



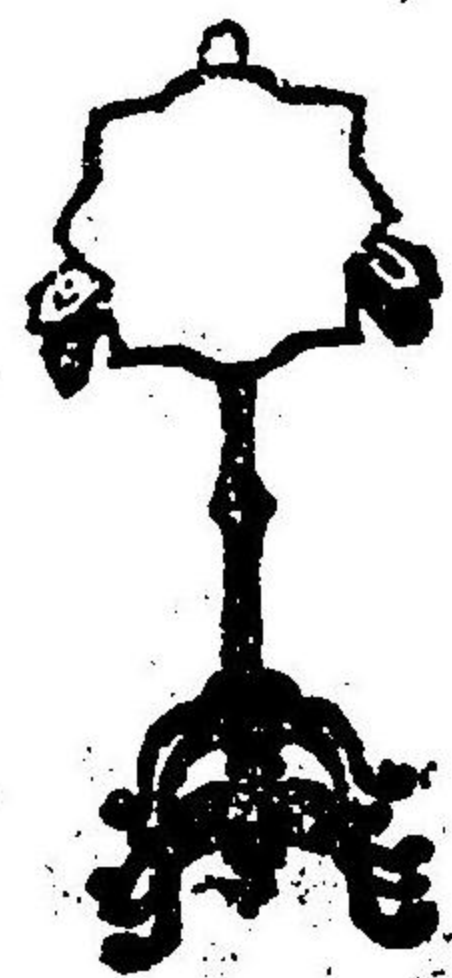
病める子を 抱きて被く  
木綿衾 白きは死の  
いろにはあらじか



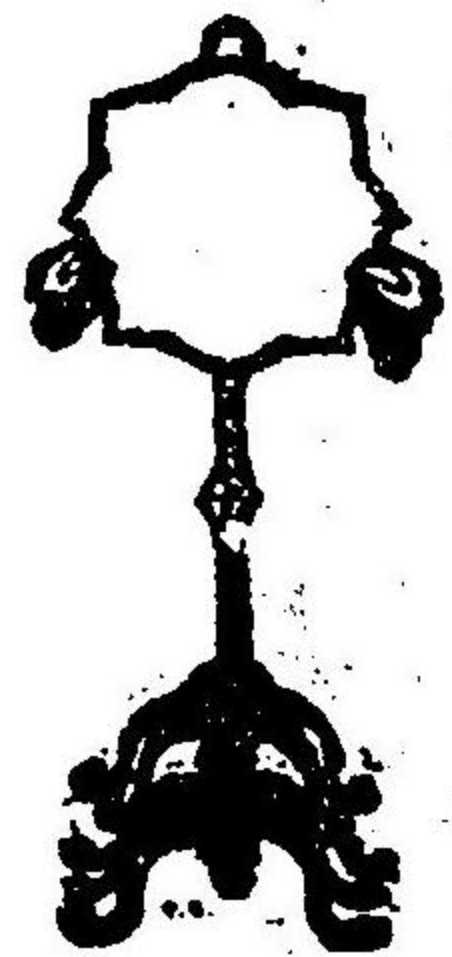
湖を なかに隔つる 寺の鐘  
鳴りぬ夜伽の むねにひびきぬ

海

いたつきは おこたりぬれど  
 身のやせの まだしるき子の  
 この頃を なぐさめばやと  
 鶺鴒沼に いざなひゆけば  
 あまつ空 隈なく晴れて  
 朝風に 海はしづけし  
 をさな子を 先にたてつつ  
 松が根の まなご路踏みて



なぎさにぞ 歩みよりける  
 此海の ゆたけき見なば  
 よろこびて 笑みやすらんと  
 おもひつつ 率てきぬる子は  
 打寄する 浪におどろき  
 衣手に すがりて泣きぬ  
 ものおづる わが子ならぬを  
 なにすとか かくは泣くらん  
 網さらす 芝浦ちかく  
 家はしも つねにあれども



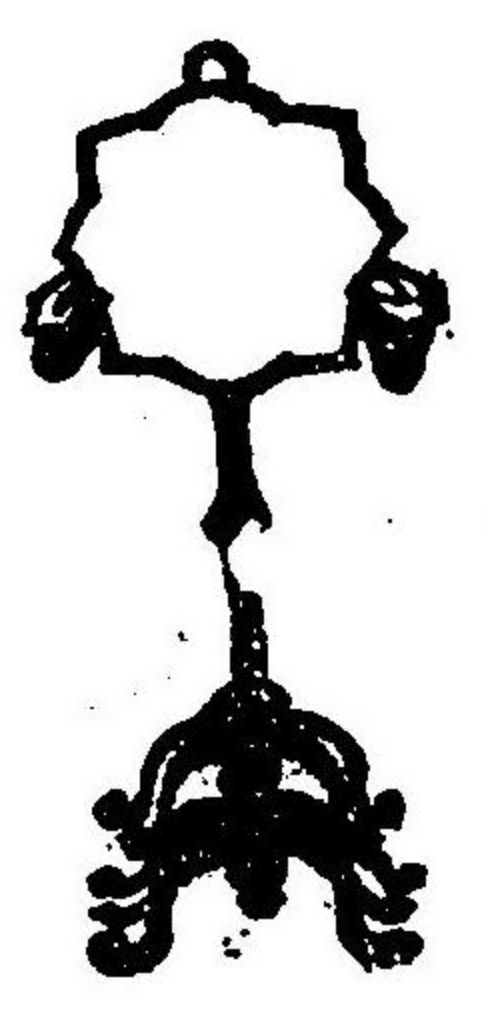
110111  
11110111

011111



我<sup>わが</sup>背<sup>せ</sup>子<sup>こ</sup>の  
虚<sup>うつ</sup>木<sup>き</sup>綿<sup>わた</sup>の  
うべしこそ  
夢<sup>ゆめ</sup>にだに  
あはれをさな子<sup>こ</sup>

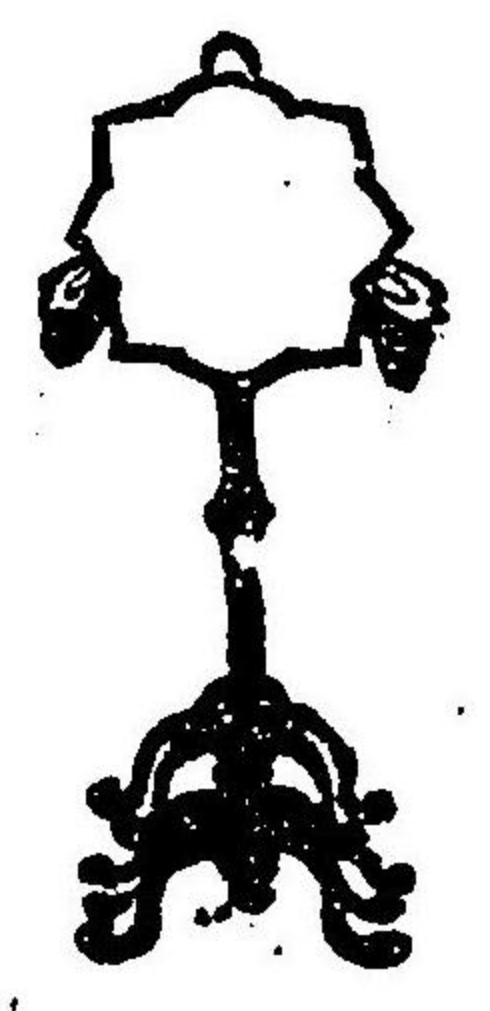
い<sup>い</sup>で<sup>で</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>し<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>り  
こ<sup>こ</sup>も<sup>も</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>居<sup>ゐ</sup>れ<sup>れ</sup>ば  
海<sup>うみ</sup>て<sup>て</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>を  
え<sup>え</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>ざ<sup>ざ</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>れ





前栽の  
ゆふべこほろぎ

前栽せんさいの  
女を郎ら花はな  
君きみあ  
らぬま  
に枯かれ  
なん  
となく  
何なにを  
音ねに  
なく

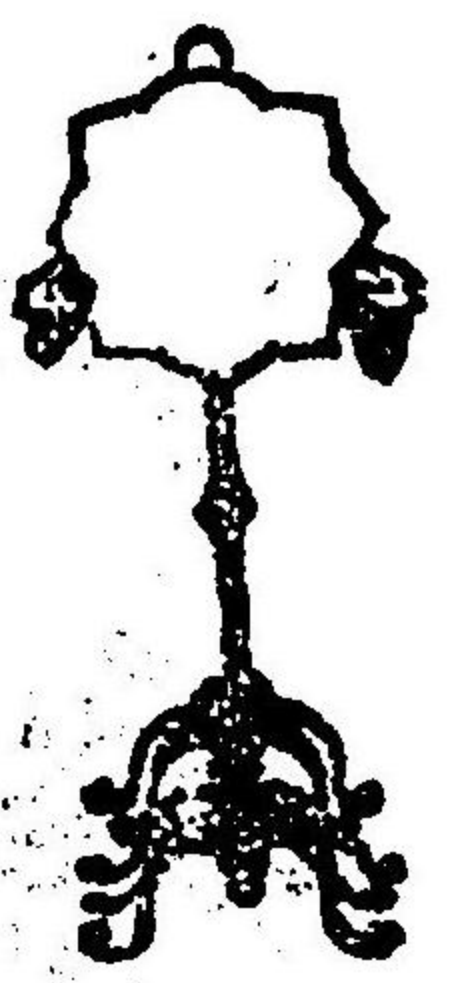


君きみを  
おも  
ふ心こころ  
ひと  
すぢ二ふた  
すぢの  
征せ箭や  
折をり  
くべ  
てた  
け  
ば烟けむり  
にむ  
せ  
び  
て  
ぞ泣な  
く

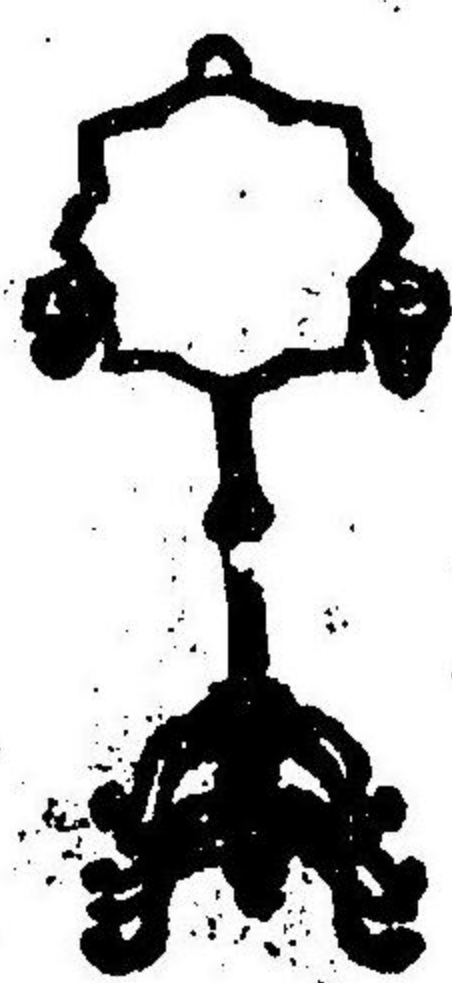
筒井筒 轆轤にかけし 千尋栲繩  
はづれては 深きなげきに 沈むみな底

わかれては あれと甲斐なき 晝のともし火  
茜さし 照るらんときを 待てば久しも

月をさへ 猶隔つるを

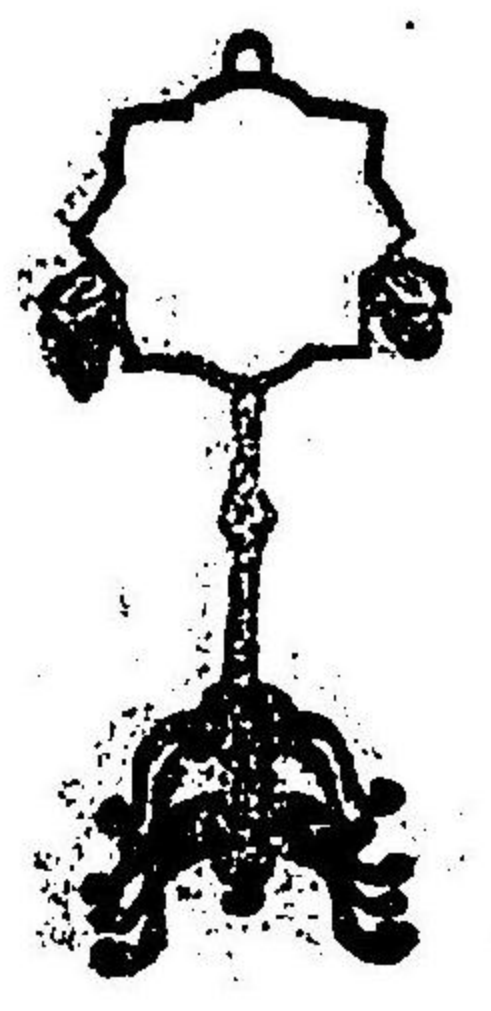


あすのごと 待つ子あはれと  
おもひけるかな



いもうとの 工<sup>たくみ</sup>めでたし なに人<sup>ひと</sup>か  
見えぬころの わがあとたづねん

ふふむ 薔<sup>きき</sup>薇<sup>び</sup> 見<sup>み</sup>れば羨<sup>うらやま</sup> なきにあらず  
さはれ咲<sup>さ</sup>きしを 悔<sup>く</sup>ゆとおぼすな



くれなるを 照<sup>てる</sup>日<sup>ひ</sup>にきほへ  
から葵<sup>あひま</sup> われは伏<sup>ふ</sup>目<sup>め</sup>の  
小<sup>こ</sup>百<sup>ひゃく</sup>合<sup>ごう</sup>白<sup>はく</sup>百<sup>ひゃく</sup>合<sup>ごう</sup>



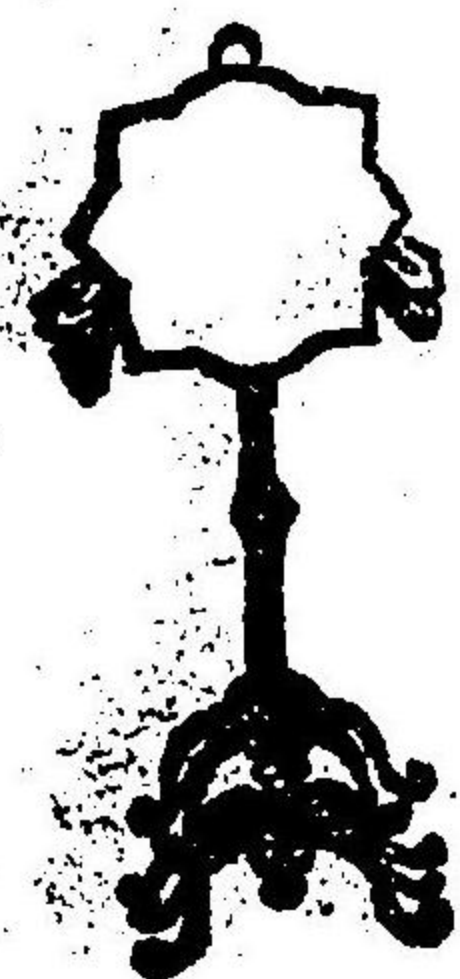
おほかたは 寂<sup>さび</sup>しと避<sup>よ</sup>きぬ さらぬさへ  
かたき胡<sup>こ</sup>桃<sup>もも</sup>と かへりみざりき

わざをぎに くらべて傲<sup>おご</sup>り ばちゆりの香<sup>か</sup>

身にしめてこし 人をおそれき

まつとつく 妹に泣く 老嶋田  
紫紺の羽織 ぬぎてをさめつ

夢みけり 世知らではつる 少女子が  
墓に挿すてふ 白花さうび



たがはざりき 名を知りてより  
八年経し 聞の及の 戀にはあれと



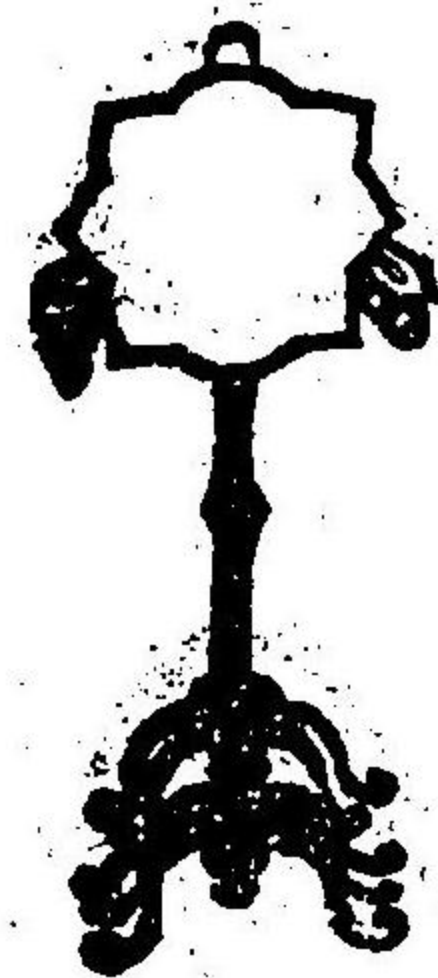
燭照るや 見れば見まさず 見ねば見ます  
君が目なざし 項のうへに

何とかは まだ疎き君 見まししと

きのふの文の紅を悔いにき

光あれと 呼ばん日久に 待ちし日は  
けふぞ心よ 闇よりさめよ

ゆあみはてて 立つ塗床の 上曳くや  
緑七尺 束げんものうし



緋綾子に 金糸銀糸の 總摸様  
五十四帖は 流轉のすがた



函迫や 紅白にはふ 羽二重の  
襟にはさめる 錆茶金襴

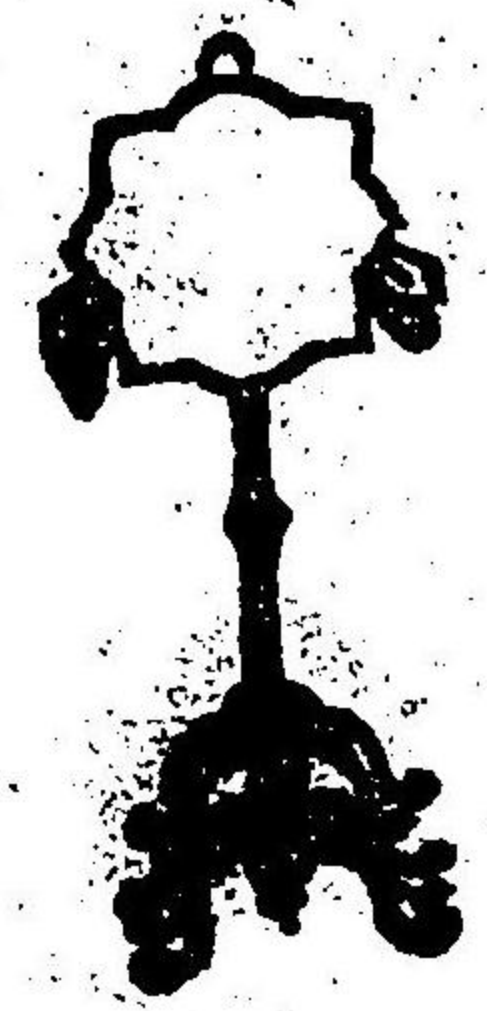
前ざしの 黄金か櫛の 瑠璃か



あらず映ゆるは 黒髪くろかみのつや

流離りゅうりに 似にるも興きょうある 旅路たびぢよと  
雪ゆきの夜よ汽車きしやに ふたりのりにき

いたりつかば 舟ふねに不知火しるほひ もゆる海うみを  
われ一人ひとり載のせて 漕こぎたみ給たまへ



新京極しんきょうごく くゆる魚いさな蠟ろうの 燭しよく千枝せんし  
見失みうしはじと 御手みでにすがりぬ



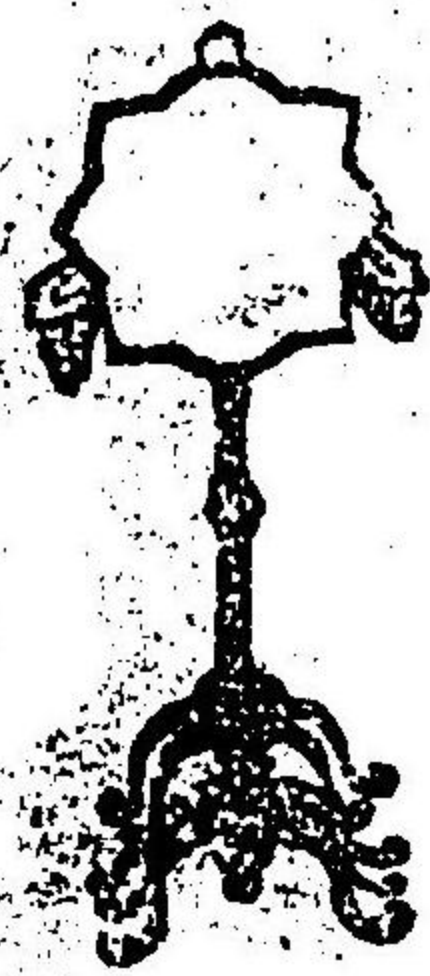
廓くわく近ちかき 紫川むらさきがはの ひがし町まち  
町湯まちゆにしりし 舞子まひこもありき

拂子はらひことれる 即非すくひが像かたの 背せのきみに

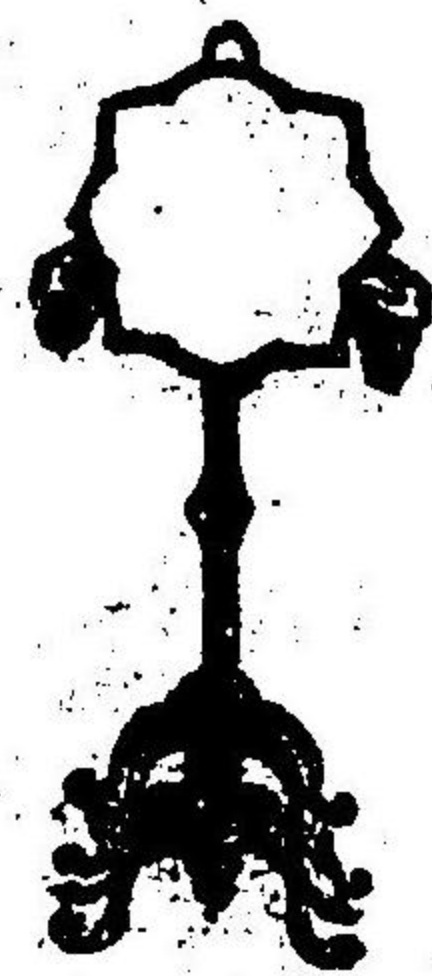
似たる笑ひし 梅ちる御堂

折りてたぶや 琅玕碎く 山川の  
しぶきにぬれし こがね山吹

企救濱の 磯の岩間に 寐わすれし  
小き蛸を はなちけるかな



さしかくる 日傘いなみぬ  
太宰府や 遊絲もゆる 礎のわたり



夕風に 袂すすしき 常磐橋  
上りの漁車は なほ妬かりき

午静に 鳳求風の おもひ出や

酒釀む隣 桐のはなちる

ただ中は 蓮華にかふる 牡丹の座  
佛しれりや 晶子曼陀羅

死いろの 歌に倦む世や 口によぶ  
王者にとほき 覇者のとさめさ



戀は人の 生の酵母 戀すとして  
など罪の子と ものめかすらん



ときめけば 性なき口に 歌はれぬ  
論なう洛陽 第一のはな

灸よくと 性なき歌の 口ささら

押へて逃げば 噴ぶかひあらじ

蛾の眉の 響めば 響む 葡萄茶ぞめ  
裳につくる人 袴たかきひと

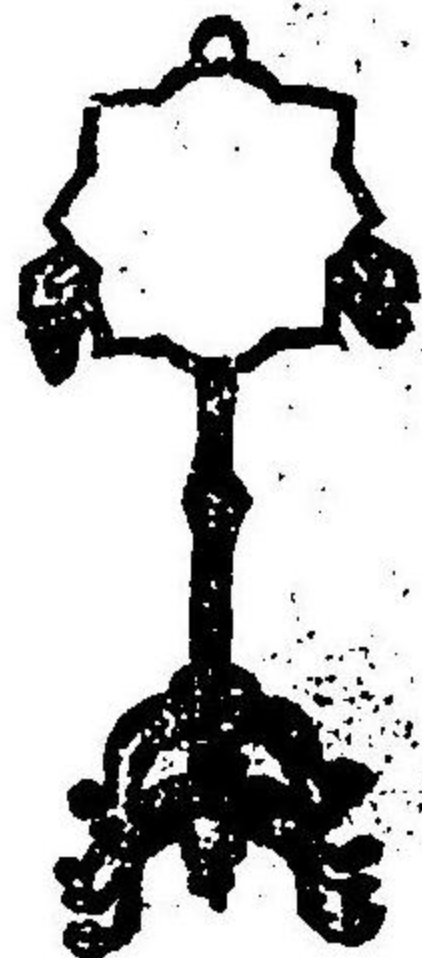
わくらはに しては見つれど 世のすなる  
救ふさはず われ恥ぢにけり



過現未

われ走る  
柳を疾風  
拍車に腋の  
駒の鬣  
丈なる髪ぞ  
解け靡く

拂ふごと  
血にじむ  
戦ぐごと  
戦ぐごと



追ふは誰そ

にび色衣  
三人五人  
骨立つ腕に  
焔を發つ

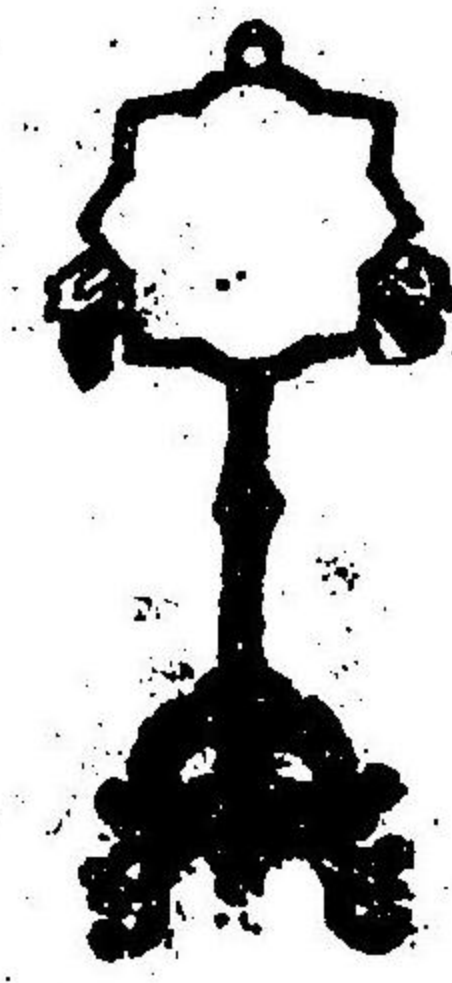
見え隠れ  
あらず百千  
揮る鞭の  
えりんす

われ駐る  
旭にゑらぎの  
卻れ散けよ  
昨日の影に

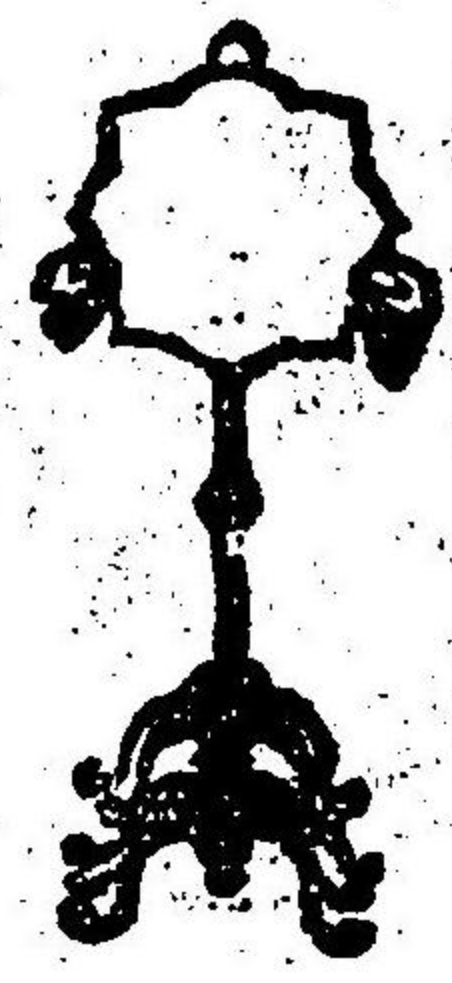
齒かがやく  
えりんす  
追ひすがり

今日に驚く  
え知らじ明日の

汝達は  
我姿



うた日記終





明治四十年九月二十七日印刷  
明治四十年九月三十日發行

「歌日記」  
(實價金壹圓八拾錢)

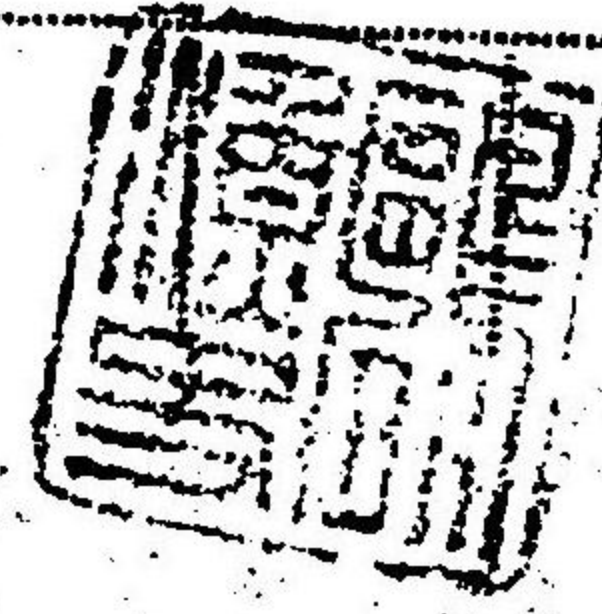
著者 森 林 太 郎

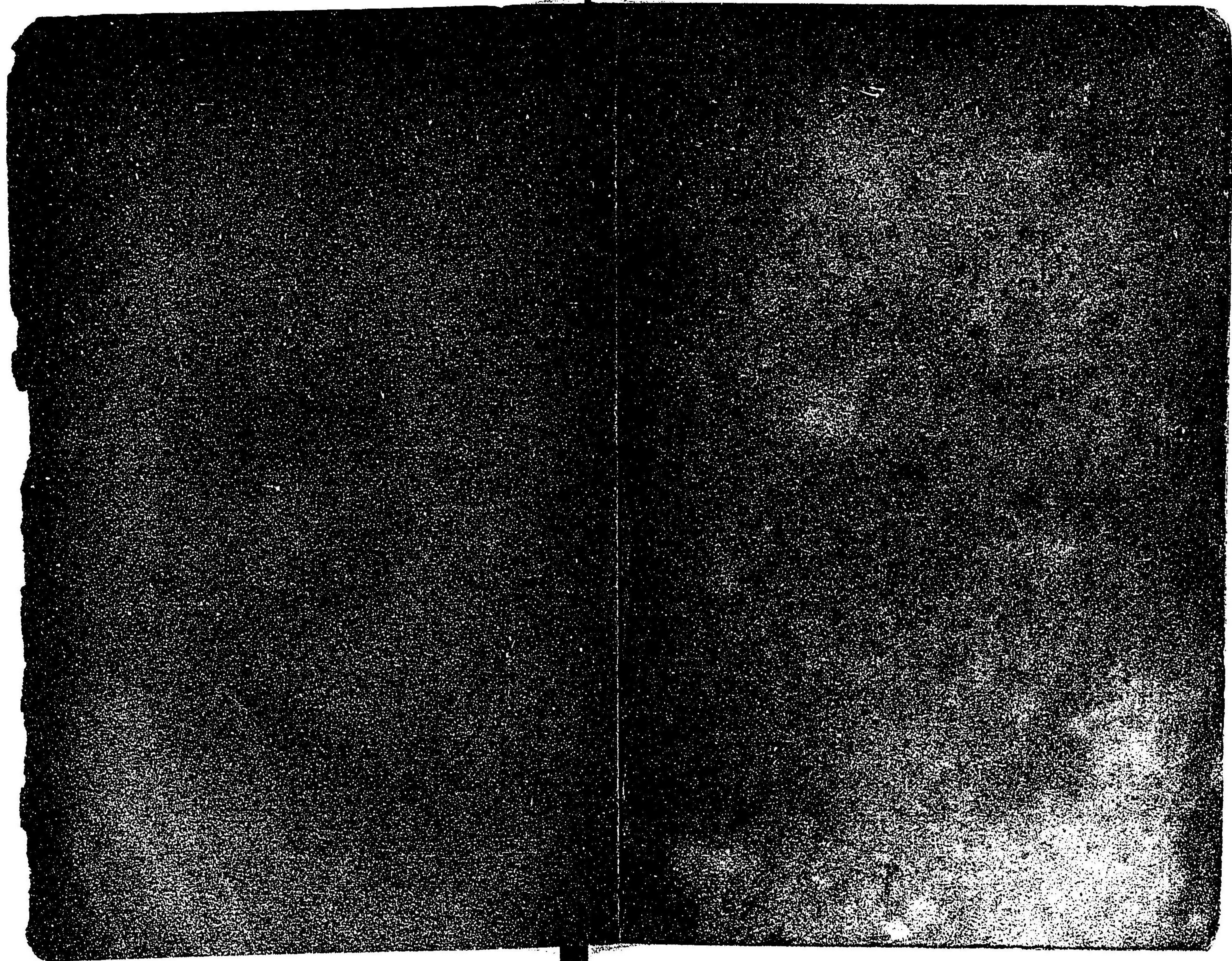
發行者 和 田 靜 子  
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行所 春 陽 堂  
東京市日本橋區通四丁目角  
(電話本局五十一番)

印刷者 中 野 鐵 太 郎  
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

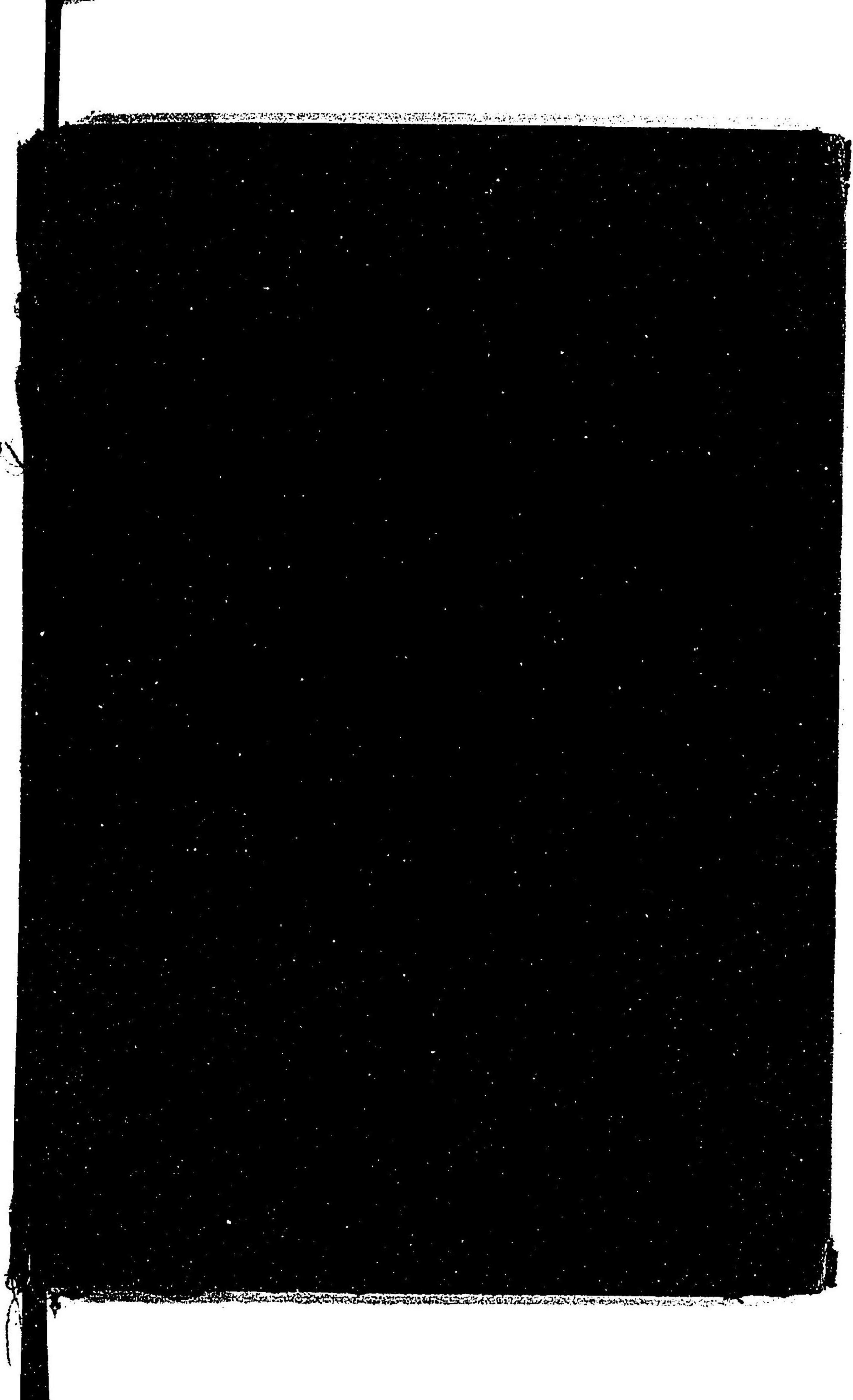
印刷所 帝國印刷株式會社  
東京市京橋區築地三丁目十五番地





51
1770







205039-000-0

31-410

うた日記

森 鷗外/著

M40

EDV-0031



